

新美南吉の作文指導から学ぶ

新美先生と作文帳

奈良教育大学教授 松川 利広

児童文学の不朽の名作「ごんぎつね」「手袋を買いに」などに代表される児童文学者、新美南吉。その新美南吉が生前、教師として、教え子たちが書いた作文の添削指導を行っていたことはあまり知られていない。今回は、児童文学作品の研究を精力的に続ける、奈良教育大学の松川利広教授に、教え子たちへのインタビュー、新美南吉の添削作文について執筆をいただいた。



一年詩集の序

生れいでて
舞う蝸牛の
触角のごと
しずくの音に
驚かむ
風の光に
ほめくべし
花も匂わば
酔いしれむ

(昭和十四年二月一日)

ろつか。幸いにも、新美先生の教え子である、加藤千津子(旧姓山口)さんと本城良子さんにインタビュー(平成十七年一月七日、安城市、加藤千津子さん宅)する機会に恵まれ、在りし日の新美先生に出会うことができた。

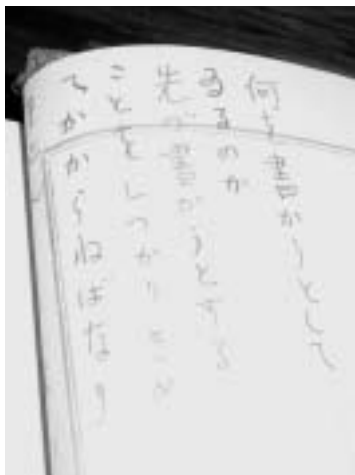
応接間に通され、まず私の目に入つたものは、B5サイズほどの作文帳であつた。黒表紙の上部に白いラベルが貼付され、そこには、作文帳一学年一組、氏名、杉浦さち24」と楷書で記されていた。袋とじに折られた黄ばんだ原稿用紙(女学校の校章入り)は、丁寧に黒紐で綴じられ、厚さは五センチほどであつた。



杉浦さんの作文帳

昭和十三年四月、新美南吉(本名正八)は、愛知県立安城高等学校の教諭になった。当時の日記に「さて、ぼくは女学校の先生です。何んだかヌクヌクして歩いてゐる。」と記しているように、ようやく南吉の心にも春が訪れた。南吉は、新美先生として、一年生(十九回生)五十六名(一学年一組)の組担任となり、一、四年の英語、一・二年の国語、作文と農業を担当。教師も生徒も一年生、まさに希望の春であつた。その後、新美先生は、十九回生の組担任として、二・三・四年と持ち上がり、卒業まで一緒であつた(当時は、四年で卒業)。十九回生が卒業していった昭和十七年は、『おぢいさんのランプ』(有光社、挿絵、棟方志功)の刊行や「牛をつないだ樺の木」「花のき村と盗人たち」などの代表作が生まれた年でもあつた。

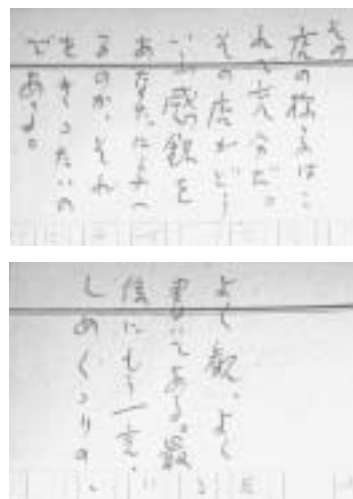
冒頭に掲げた詩「一年詩集の序」は、一年生の文詩集『雪とひばり』の序詩である。新美先生は、その後、六冊の文詩集を編むなど、ことのほか詩や作文の指導に力を入れた。英語教師であり、童謡詩人、童話作家でもあつた、新美先生はどのような作文指導を行っていたのであ



まず書く内容を決めることの大切さを指導した添削

をしつかりきめてかからねばなりません」と評語を記した。

その後、新美先生の赤ペンによって、明らかな誤字・脱字の訂正、表現の言い換え指導（つばをおさえながらーつばをのみこみながら）などが行われ、二か月も経つと、杉浦さんは、概評もA、A となり、評語も「題材も面白い。書きかたもよい。」「元氣のあふれた筆致で内容にふさはしい。」「この書き出しはよろしい」などの評語をもらうまでに力をつけていく。このような作文指導は、休むことなく継続的に行われ、杉浦さんの作文力も、着実に伸びていく。次に、四年生の作文を紹介する。



新美南吉による赤ペン添削

この作文帳は、尾頭さち（旧姓杉浦）さんが一年生から四年生までの間に書き記したほぼ全ての作文を、日付順に綴じたものである。どれにも、新美先生の赤ペンが入っていた。

当時、作文の時間は、週に一回あり、一週目は作文を書く時間であった。題は課題が用意されるときとそうでないときがあった。書き終わらない生徒は、その日のうちに提出することになっていた。新美先生は、次の週までに赤ペンを入れ、二週目の授業では、具体的な批評が行われた。記述と批評が交互に行われ、いたって単純な授業展開である。しかし、単純ではあるが、そこには心地よい緊張感をともなう、密度

の濃い学習が成立していた。次に、入学時の作文を紹介する。

入学を前に

「ホウホケキヨケキヨ」とつぶやすが香ひよき梅の枝を飛びまはる。予習によねのなかつた私はとうとう此のうぐひ（す）の声にさそいだされて青々とふきだした若芽の間をうねうねと歩みながら、明日からの入学をゆめうつつにそうそうした。

あの女学校に入学したらうんと勉強しよう。そうしてすきなオルガンもうんとならつて人一倍上手にならう。あそつたそれからこのよはい体を丈夫にせねばならぬがどうしたら丈夫になるだらう。（後略、なお旧漢字は新漢字に改めた。）

この作文は、作文帳の最初に綴じられているものであり、日付から一年生の四月十三日に書かれたものである。この作文に対して、新美先生は、原稿用紙の右上に概評A、左上に「何を書かつとしてゐるのか 先づ書かつとすること

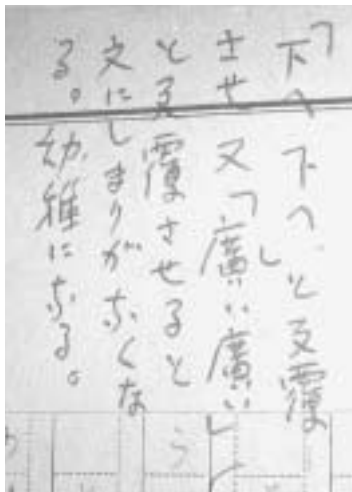
流れによせて

満々と沃野を潤して行く川。

その流れを上へ、上へとたどつて行つたなら、細い小さな流れになるだらう。

その流れを下へ、下へとたどつて行つたなら、「果は」を挿入）広い広い（後半の「広い」を削除）海へと続いてゐ（と続いてゐ」を削除、「達す」を挿入）るだらう。

この部分の上部には、「下へ下へ」と反覆させ又「広い広い」と反覆させると文にしまりがなくなる。幼稚になる。」とかなり本格的な赤ペンが入る。指導というよりも鍛錬という言葉の方がふさわしい赤ペンである。



「鍛錬」という言葉にふさわしい添削

この作文の最後には、先生の少し長めの総評が記されている。

「満々と沃野を潤して行く川」といふ言葉は少し現実ばなれをした表現で、明治用水のやうな気がしない。「流れによせて」といふからには、その流れが身近にあるべきだから、もう少し明治用水を想起させる単語がほしかった。終りに自らの運命を持ち出して流れの運命に比するのは技巧的ではあるが、よい。」

このように、新美先生の赤ペンは、概評で、先ずは安堵させ、部分評で課題を焦点化し、総評で正負のバランスを取るといったものが多い。このような赤ペンは、一年生全員に施され、新美先生は、一人一人の作文力をよく理解し、個に応じた指導を行っていた。新美先生の赤ペンは、多くの生徒の書く意欲や励みになっていたことは確かである。「作文の時間はあまり嬉しいわけではありませんが、次の批評の時間はそれは楽しみでした。なぜ批評の時間がそんなに待たれたかといいますが、うまい人は言うにおよびませんが、全員に満遍なく、先生はどこかつまいところを見つけたして、それぞ

南吉は、昭和十年、東京外国語学校四年生のとき、「バイロンについて」と題する文章を書き、その中で、文と内容、換言すれば、形式と内容が不即不離の表裏関係を保ち、どちらが主ともいいがたく、文は内容を忠実に伝えさえすれば、それでよいというわけではなく、文そのものと内容とがいしよになって、そこから匂いとか、情緒とかその他、ともかく、美しい分泌物のごときものを造りださねばならない」と考察している。

この文学観・文章観は、女学校における赤ペんに反映され、部分と全体、形式と内容のバランスを大切にした所見が多く見られる。このように見てくると、教師の赤ペン力は、文学観、文章観とも呼べるものを醸成しつつ、自らも書き続ける中で育っていくもののように見える。

当時、ポトフォリオ評価という用語はなかったが、杉浦さちさんの「作文帳」は、立派なポトフォリオであり、杉浦さんと新美先生の結晶作用（コラボレーション）によってもたらされたものである。きつと、杉浦さんをはじめ、十九回生全員との間には、それぞれの結晶作用があったことだろう。そのことを裏付けけるよう



松川先生のインタビューに応じる加藤さんと本城さん

れほめてくださいました。」という本城さんの言葉は、そのことを端的に言い表している。

それは、「僕が作文を担当していることは重労働なんだよ」とつぶやきながらも継続されたここに、生徒に対しても、自分に対しても、安易な道を選択することをよしとせず、つねに高みを目指していた、新美先生の生き方をみることが出来る。

に、新美先生の日記には、生徒の作文や詩の一部を書き記した箇所が随所に出てくる。昭和十七年に多くの代表作を世に送り出すことができたのは、生徒一人一人との多様な結晶作用が創作の糧となっていたのではなからうか。その意味において、「作文帳」は、南吉研究やこれらの作文指導の研究を進めるうえで、多くの示唆を与えてくれるであろう。

(参考文献)

『新美南吉詩集 墓碑銘』巽聖歌編 英宝社
『安城の新美南吉』新美南吉に親しむ会
『花のき』十九号 新美南吉に親しむ会



松川 利広（まつかわ としひろ）

一九五二年生まれ。奈良教育大学教授。光村図書国語教科書編集委員。主な著書に『学び方を養う学校図書館』（学芸図書）、『国語科教育の理論と実践』（現代教育社）、『語彙指導の方法（語彙表編）』（光村図書）などがある。